



気になる傾向 日本人の個人主義

孤独な日本人

定説によると日本人は集団主義で、西欧人は個人主義だ。日本人集団の象徴とされているのは海外に繰り出す団体旅行である。しかし日本人こそが個人主義という説がある。この説によると、日本人は社会を信頼していない。頼りになるのは自分だけなのだ。いわば社会がバラバラの状態だという冷徹な指摘である。

いくつかの証拠がある。日本人の貯蓄率は世界的に見て比類のないほどに高い。それは老後の心配があるからだ。自分が高齢に達したときに、頼りになるのはお金である。つまり自助努力だと考えている。また、日本人は会社において自分の役割をキチンと果たす。そうしないと非難されてしまうからだ。分担が決まれば、自分の責任は完遂しなければならない。その仕事に命を懸けることもある。いわゆる過労死だ。学校におけるイジメの問題も、結局は個人がバラバラで、支えてくれる人は誰もいないのが原因だという説である。

西部劇は分業の精神

アメリカにおける起業精神の話を聞くと、西部劇を連想する。仲間が集まって町を作る。役割の分担を決めよう。拳銃の名人は保安官になるのが順当だ。馬に乗るのが得意な彼は牧場を守り、計算ができる人は銀行と現金輸送馬車という具合である。実際は映画のように単純ではないが、ここに分業の精神がある。1人の個人は弱くても、協力して強固な社会を構成する。

日本人は分担や分業が下手だ。とかく全員で同じことをする。お祭りで神輿をかつぐというと、全員が揃いのハッピーで繰り出す。ある業界で補助金が100億円あるとして、業界に10社あると、公平なのは1社10億円ずつの分配である。そして同じような事業を行う。

業界全体が同じような事業をしていれば、誰もズレいことはない。ある意味では公平な社会であるが、いかにも能率が悪い。ベンチャー企業は、ほかの会社と違う新規なことを始めるところに意味がある。実は大企業でも同じである。インターネットの勃興期の米国では、政府のネットワーク(NSFnet)の国内はMCI、海外は Sprint という分担であった。お互いに研究成果を公開



すれば、特にズレいことは起こらない。

野球からサッカーへ

個人が孤独であって社会がバラバラであると、適切な分担ができない。分業をすると仕事が片寄るから、誰かがズレいことになってしまう。しかし分業というのは先の産業革命で生まれた近代的な概念である。

現在の情報通信革命は、運輸技術を通信技術に置き換えた産業革命だ。そこでは分業が現在以上に浸透する。分業をズレいといって拒否することはできない。

日本人の精神構造を象徴しているのは、スポーツだ。野球は公平性が重視される。皆が順番に打席に立つ。そのなかにも歌舞伎のごとき筋書きがある。もうすぐ4番打者が打ちます。では、その前にテレビのコマーシャルを入れよう。これに対して情報通信革命はサッカーのようだ。皆がボールを追いかけていたのでは、メダカの学校となって勝てない。先走る選手が必要だ。それが行き過ぎるとオフサイドになる。4番打者の見せ場がない。期待の選手は執拗にマークされてしまう。

定評のある選手が蹴る前に、無名の選手がちょっとボールを飛ばしてしまうかもしれない。それでもボールは飛んで行ってしまふ。ロスタイムはコマーシャルを入れる余地を奪う。まるで筋書きがない。

チームプレイは分業である。実は野球だって分業が大切だ。スポーツに関して2つのことを書いておきたい。野球を観戦するのと自分でプレーするのは大きな違いがある。情報通信革命も、自分でプレーするよりは見るだけのほうが楽である。しかし自分でプレーしたほうが断然面白い。

もう一つ重要なことは、スポーツ競技では、勝つこともあり、負けることもあるということだ。ベンチャー企業が失敗しても再度挑戦できるように社会で支えてあげたい。

Illustration: Harada Kaori



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp